

# いろいろな出会いがあり、 そのお陰で生かされている。

## 悔いが残る人生は歩まない

意外にも、最初はいちごよりも酪農をめざし

## いちごで栃木をアピール

帝国ホテルをはじめ有名ホテルやデパートを中心に完熟いちごを出荷。一方で、鉄人坂井宏行シェフ等といちごイベント「美食の饗宴」を開催したり、観光いちご園「莓の楽園」を運営したり、まさにいちご王国栃木の先駆的存在になっているのが、野口圭吾氏。

いちご農家を始めた時は、苗の植え方すら知らなかったが、今では、自分にしかできない唯一無二のブランドを確立し、いちごで、栃木を全国にアピール。さらに世界への発信も計画中とか。その根底には、自分の子どもや未来の子ども達、都会の人達に、本物の自然の味を知ってほしいという思いがある。ひたすらに「安心、安全、新鮮、熟して美味しいいちごを作ろう」と独学で奮闘。その結果、販路が広がるのは必然だったが、「いろいろな出会いがあり、そのお陰で生かされている」と、謙虚にかみしめるように語る。



ていた。「小さい頃の夢は、アメリカやカナダの大平原で牧場を経営。馬にまたがるカウボーイになることに憧れていた」と。大阪で生まれ育ち中学3年で父親の転勤で東京に移った彼は、農業にはまったく縁がなかったが、「小さい頃から自然や動物などの映画やドラマを見るのが好きだった」とうた。

その憧れが現実味をおびてきたのは、東京農業大学での酪農実習。乳搾りや鶏などの世話を通して自信がつき、酪農家を熱望する。しかし、土地も資金もなく、新規就農には2〜3億円が必要なことから断念。いったんサラリーマンとなる。

事務と営業が嫌いで臨床検査の現場を選んだはずが、コンピュータという新しい分野を任せられたこともとポジティブで勤勉な彼は、「誰もやったことのない、システムの中核を預かるのもおもしろいだろう」と、情熱を傾け5年間取り組み大きな成果を上げる。その手腕を買われ、母校の系列大学の開校にともない、学内システムの構築を任せられた。しかし、業務が安定してくると、「前職のスパルタ的な業務と比べ何もしていない自分。死ぬ時に、何をやってきたかと悔いが残る人生」を嫌い、酪農家の夢が再燃。

時代は輸入自由化で、生乳市場も厳しい状況。初めて農産物に関心が向く。経営不振で1年でリストラされたコチヨウラン農家での農作業や、農家をまわる農業資材の営業の成果から、いよいよ自分で営農する自信がつく。今まで蓄えた千万円を全て運転資金にし、友人から借りた土地にハウスを手作り。そして、収量を差別化がつけやすいいちごを選び、徐々に規模を拡大してきた。

## 好きだったらとことんやる

「一見、憧れと偶然が重なって、順風満帆で現在（いま）があるように見える野口氏の人生。実は、常に、本気で取り組む姿勢と、有言実行のためにとことん努力する生きざまが隠されている。勉強嫌いで成績不振でも、進路を決めると勉強に目覚め、大学には2番の成績で合格。バイトでは責任あるポジションを任せられ、サークルのバンドでは人気のライブハウスでセミプロとしてレギュラー出演。「好きだったらとことんやる。やるからにはトップを目指す」という言葉にも、本気度が表れているし、実践してきたこと。努力した結果がでると、プライドが生まれ、それが快感になるのだとか。全ては、小さな成功の積み重ねなのだ。それは、逆境にあっても、変わらない信念。「自分への挑戦。できたら、その先が見える」と。

農業経営で一番大事なものはバランスだとも言う。自己満足の一人よがりにならないために、常に自問自答して客観的にものごとをとらえようとしている。さらに、情報を制するものは全てを制するとも考え、常にアンテナを張り、自らも試行錯誤する。

そんな野口氏の姿に、荒野を開拓していった強い信念のカウボーイの姿が重なって見えた。

【取材日：平成26年10月8日】

### Profile

野口 圭吾  
のぐち けいご



1962年8月10日生まれ52歳。大阪出身。15歳の時、親の転勤にともない東京へ移住。東京農業大学第一高等学校、東京農業大学農学部畜産学科卒。卒業後、臨床検査の受託業務を行う株BMLでシステムエンジニアとして手腕を発揮。その後、母校の系列大学 東京情報大学にて学内コンピュータシステムの構築に尽力。小さい頃からの憧れであった農業を始めたのは、15年間のサラリーマン生活を経た後の37歳のとき。2011年に「莓の楽園」を開園。家族は、栃木市出身の奥様と一娘二息子。